キャラクター名
薄雪 花蓮

プレイヤー名

シンドローム	モルフェウス ブラックドッグ	ワークス	刑事	カヴァー	刑事
オプショナル		年齢	26	性別	女
覚醒	命令	衝動	嫌悪	初期侵食率	34 %
出自	名家の生まれ	経験	屈辱	邂逅	腐れ縁

	基本値	ワークス	ボーナス	成長	他修正	能力値
肉体	3	0	0			3
感覚	3	1	0			4
精神	1	0	0			1
社会	1	0	0			1

HP	27
行動値	9
(非装備時)	9
戦闘移動	14
全力移動	28

肉体			感覚			精神			社会		
技能	SL	修正	技能	SL	修正	技能	SL	修正	技能	SL	修正
白兵			射撃	1		ＲＣ			交渉		
回避			知覚	1		意志			調達	1	
運転：	2		芸術：			知識：			情報：裏社会	2	
運転：			芸術：			知識：			情報：警察	2	
運転：			芸術：			知識：			情報：		
運転：			芸術：			知識：			情報：		
運転：			芸術：			知識：			情報：		

武器・コンボ	能力	命中値	G値	攻撃力	射程	メモ
大型拳銃	射撃	4r-1		5		

防具	価格	装甲	回避	行動	メモ

合計装甲：	0	合計回避：	0

所持品	
ギャランティプラス	
エナジースタッフ	
デモンズシード	

ロイス				
対象	感情(pos)	感情(neg)	タイタス	消費
同僚	P	N		
	P	N		
	P	N		
	P	N		
	P	N		
	P	N		
	P	N		

最大財産P:	4	残り財産P：	49

スキル名	SL	コスト	タイミング	射程	対象	判定	制限	メモ
ワーディング	★	-	オート	視界	シーン	自動	-	
効果：非オーヴァードのエキストラ化								
リザレクト	0	1d10	気絶時	-	自身	自動	↓100	
効果：コスト分のHPで復活								
黄金錬成	4	(4)	常時	至近	自身	自動		
効果：常備化ポイント+[Lv*10]								
サードウォッチ	1	2	メジャー	至近	自身	自動		
効果：監視カメラを通してシーンに登場できる								
サイコメトリー	1	1	メジャー	-	-	情報		
効果：〈情報:〉判定のダイス+[Lv+2]個								
水晶の剣	3	4	メジャー	至近	効果参照	自動		
効果：指定した武器の攻撃力+[Lv*2]　シナリオ三回								
解放の雷	2	4	メジャー	視界	単体	RC		
効果：次のMAのC値-1(下限6)、ダメージ+[Lv*2]								
紫電の刃	1	3	メジャー	視界	単体	RC	100	
効果：次の攻撃に装甲無視を付与する シナリオLv回								
ヒール	2	2	メジャー	視界	単体	RC		
効果：HP[(Lv)D+【精神】]回復								
タッピング&オンエア	★							
効果：								
セキュリティカット	★							
効果：								
効果：								
効果：								
効果：								
効果：								
効果：								

R担所属のオーヴァード。元々は一般人だがレネゲイドを知っている刑事で、撃鉄の補佐のような役割を宛てがわれることが多かったが、とある事件をきっかけにオーヴァードに覚醒する

現在は正式に"ファーレンフリード"撃鉄鈴奈とコンビを組んでいる。コードネームは彼女の真白な髪を喩えたとも、彼女の《水晶の剣》によって撃鉄の持つ弓が"ファーレンフリード"へと強化されるからだともいわれる
戦闘では撃鉄の集中力を研ぎ澄ませた、会心率と威力を高めることに特化している。逆に、撃鉄以外と組んでいる時は余り役立たないかもしれない
　背中を袈裟懸けに斬られた傷痕と、腹部の一部に傷痕があり、背中や腹部が見える服は着たがらない

　十年ほど前に年の離れた妹(薄雪 芳乃)と散歩していたとき、FHエージェント"ノーチョイス"へと拉致された過去がある
　彼が作り出した空間から出るためには、自分か妹のどちらかが死ななくてはならないらしいと気付いた彼女は、自分が死ぬことで妹だけは無事に助けようと内心で強く決意する。10歳も年が離れた、多分何もわかっていないであろう芳乃は何も知らないままでいい。ただ、食料の供給量も不足しておりこのままでは飢えや寒さ、疲労で進めなくなるのも遠くない未来だろう。そう思い、未だ動ける内にカレンは『襲われる妹を身を挺して庇う』というシチュエーションで死んでしまおうと決めた。
　刃が身体を貫通する感覚。死のう、と決めていたはずなのにその白刃の輝きが恐ろしくてつい背を向けて刃傷を受けてしまった
　目の前が赤く染まる。即死こそできなかったが、満足な治療もできないこの場所では何れ死ぬことになるだろう、と分かった。致命的な場所が傷ついてしまったような感覚があった。傷口だけは熱いのに、体全体は冷たくなっていく。
　進まなければ次のシチュエーションが出ない。進みたい。進めない。体が動かない。どうしよう、意識が朦朧として何も考えられなくなっていく。五月蠅かった心臓の鼓動が徐々に弱く、遠く、小さくなる
　あまりにも苦しくて目を閉じた。そして少し後、遠くに聞こえる妹の声で目を覚ます。
　ああ、ごめんね心配かけて――。大丈夫だから、少しだけ休みたいの――。
　自分に声をかけていると想像した花蓮はそんな声を出すつもりで目を開く。そして、実際には全く違った現実にハッとした
「姉さんのことを忘れてもいい。他の誰が私を忘れてしまってもいい。姉さんが生きて覚えていてくれるなら、それだけでいい」